

目的 食欲は、食品の色と関連するといわれているが、年齢による変化についての報告は少ない。そこで前報(1978年、日本家政学会発表)の女子学生につづき、今回は、12才~20才までの発育期の男女についてアンケート調査をし、色彩嗜好と年齢との関連性を検討したので報告する。

方法 調査した色相は、F. Birren が食欲と色との関連について発表した7色(赤、オレンジ、黄、黄緑、青、緑、紫)にピンクと茶を加えた9色である。調査項目は、「食欲と色との関連」「食品を選ぶ条件」「色と連想食品」「9色の嗜好度」「好きな色」などである。色に対する嗜好度は低年齢層にも回答しやすいHedonic scale(5段階尺度)を用い、男子1,113名、女子1,154名を対象に1978年6月に調査した。統計処理は、 χ^2 テスト、F表、相関係数、因子分析などによって検定し、色彩嗜好と年齢との関連を検討した。

結果 (1)食欲と色との関連性を認識しているのは、女子が多く85.9~67.9%、男子は80.0~53.0%で、この差は χ^2 テストによって有意と認められた。(2)食品を選ぶ条件として、男子は、味、値段、大きさを重視するが、女子は、大きさよりも、色、においをあげ、デリケートな一面を表わしている。(3)連想する食品の殆んどが果物・野菜類であった。(4)色の嗜好度の傾向は、暖色系が高く標準偏差が小さく、寒色系はその逆であり、また、高年齢ほど標準偏差は小さくなる傾向があった。9色の嗜好度に相連のあることをF検定により有意と認めた。(5)好きな色は男女とも第1位が白であった。以上のような結果から、色彩嗜好は年齢により異なる面があるものと思われる。